The Japan Society of Educational Sociology

今日の大学生における文化資本形成

—学習経験と学生生活に関する質問紙調査の結果から—

大前 敦巳（上越教育大学）

1．変化した学生生活の中で

学生消費者主義（リースマン）や大学の商業化（ボック）など、高等教育拡大がもたらした問題を伴って多くの国々に共通してみられる変化の状況の中、大学生の生活も、集団としての学生文化を形成するよりも、消費文化の中で個人化・多様化した生き方やライフスタイルに変化していることが指摘される（武内編, 2003, 溝上, 2004 など）。ブルデューらの『遺産相続者たち』から 40 年以上が経過した今日、大学生にとって「文化資本」はいかなる意味をもち、それに基づく差異化や卓越化はいかに起っているのだろうか。

当のフランスでも同様の変化がみられ、国立学生生活観察研究所(Observatoire national de la Vie Etudiante : OVE)は、1994 年から 3 年おきに全国学生生活調査を実施しており、学生生活の社会経済条件のほか、学生の社会的位置によって多様に異なる文化慣習行動の状況を報告している。

日本の大学生を対象にしたものとして、宮島・藤田ら(1987, 1991)が先駆的な実証研究を行っている。武内(1999)は、学生文化の規定要因の 1 つに学生のハビタスを挙げ、大規模調査に基づいて親の学歴による学生生活の影響を指摘している。しかし、大学の今日的な状況をふまえながら、文化資本の相続や伝達の問題に焦点を当てた調査研究は依然として少ない。

本報告では、今日の大学生の文化資本をめぐる問題について、その形成過程をなす時間軸を考慮に入れた調査結果の分析を試みる。第一に、学生の社会的出自、過去の経験、現在の学生生活とのかかわりから、第二に、学生生活を通じた文化習得過程について分析する。

2．調査の概要

本報告で用いるデータは、次の 2 つの質問紙調査をもとにしている。一つは、2002 年に関西と北陸・上越の文科系を中心とする学生を対象に実施した、学習経歴と学生生活に関する調査である。この調査では、フランスのルーアン大学とパリ第 8 大学の文学・人文科学系学部でも、比較対照のために同様の調査を実施している。もう一つは、上越教育大学と関西の私立大学・短大で 2003 年（1 年次）と 2004 年（2 年次）に実施した、学生生活と文化についてのパネル追跡調査である。両調査のサンプル構成は、表 1・2 の通りである。

表1 「現代大学・短大生の学習経歴と学生生活に関する調査」サンプル一覧

対象校（主に文科系学部・学科）	実施時期	サンプル数
関西の競争的な国公立大学	2002.6	309
関西の競争的な私立大学	2002.6	272
関西の国公立大学	2002.7	147
関西の私立大学	2002.6	188
関西の私立短期大学	2002.5～6	682
北陸の国公立大学	2002.7	375
北陸の私立大学	2002.6	204
上越教育大学	2002.1	293
ルーアン・パリ第8大学	2002.2～3	264

表2 「大学・短大生の生活と文化についての調査 2003～2004 年」サンプル一覧

大学・短大名（略称）	1年次在籍者数	1年次（2003 年）有効回答数（回収率）	2年次（2004 年）有効回答数（回収率）	1・2年次パネルデータ数（回収率）
上越教育大学（上教大）	168	106 （63.1%）	139 （82.7%）	83（49.4%）
関西私立大学（関西私大）	325	202 （62.2%）	109 （33.5%）	83（25.5%）
関西私立短期大学（私立短大）	179	166 （92.7%）	159 （88.8%）	132（73.7%）

NII-Electronic Library Service

The Japan Society of Educational Sociology

3．社会的出自・過去の経験とのかかわり

表3は、過去1ヶ月間に行った文化活動経験をたずねた結果である。関西と北陸の大学では、大学タイプにかかわらず比較的類似した傾向がみられ、カラオケや映画館に行ったと答える比率が高い。ルーアン・パリ第8大学ではOVE全国調査と類似して、映画館のほかディスコ・クラブ、音楽コンサート、美術館・展覧会など、多様な文化活動に接する程度が大きい。

これらの文化活動について、「劇場」「クラシック・オペラのコンサート」「美術館・展覧会」を合わせて正統的文化、「映画館」「他の音楽コンサート」「スポーツ観戦」を中間文化、「ディスコ・クラブ」「カラオケ」を大衆文化と置き換え、それぞれの社会的意味の違いについて分析を進めた（以下結果は当日配布）。

正統的文化については、親の職業・学歴との結びつきが強いフランスに対し、関西では競争的な大学の母親学歴のみ正の効果を示し、地方や短大で社会的出自の効果はみられなかった。代わって、家庭教育や習いごとの経験、大学での文化活動や勉学へのコミットが、関西と北陸の大学・短大において関与していた。つまり、出自階層文化に規定されるよりも、後天的な経験から獲得される傾向が大きい。

中間文化は社会的出自や過去の経験との一貫した関連性はないが、女性に多く行われ、経済的条件が関与する傾向がみられる。大衆文化は、アルバイト経験と勉学への非コミットとのかかわりが強く、アカデミックな領域から離れた消費文化と親和的であるといえる。

4．学生生活を通じた文化習得

続いて、文化活動を行う程度の違いに加え、1・2年次の間に活動程度が変化した度合を分析の変数に取り上げた。その度合は、過去の条件よりも、各大学における学生生活の状況が関与する結果になっている。

学内クラブ・サークルを中心に文化活動が行われる上教大では、正統的文化にはリーダシップを増した学生、中間文化には協調能力が高くなった学生、大衆文化には受動性の高い学生が参入する傾向がみられる。

関西私大では、授業を通じた専門知識を獲得することが、文化活動の程度を高めることに結びついている。大衆文化への参入度を強める学生も、授業満足度は高いという特徴がある。

2年で卒業を迎える私立短大生も、授業に熱心な学生が正統的文化を志向するのに対し、中間・大衆文化には、友人関係や教師とのコミュニケーションを重視する学生が多くなる。

関西と北陸の大学・短大生において、消費文化の影響下で文化活動が盛んに行われる一方、授業やクラブ・サークルをはじめとする大学生活へのコミットメントが、活動程度の差を生み出す傾向が認められる。消費文化との連続性をもちながら、文化資本の形成条件となる「必要性への距離」を提供しているのは、社会的出自よりも学校、特に大学の場においてであり、その機能を衰弱させないことが必要と考える。

表3　文化活動に関して過去1ヶ月間に行った場所　　単位%

	映画館	劇場	クラシック・オペラ	他の音楽コンサート	美術館・展覧会	スポーツ観戦	ディスコ・クラブ	カラオケ
関西競争的国公私大	24.4	4.0	2.1	11.8	11.6	14.5	3.8	47.1
関西国公私大	30.1	4.2	1.5	6.9	7.2	15.7	3.6	53.6
関西私立短大	36.0	3.7	0.3	7.2	9.3	7.8	4.0	65.6
北陸上越国公私大	31.7	1.4	3.6	11.1	14.4	4.7	1.3	47.9
ルーアン・パリ第8	85.2	12.2	6.8	27.0	24.0	16.0	44.1	11.8
OVE 調査 2003 年	66.3	11.7	7.0	21.8	27.5	22.6	34.2	–

NII-Electronic Library Service